HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	授受補助動詞の使用制限に与える敬語化の影響について：「くださる」「いただく」を用いた感謝表現を中心に
Author(s)	山口, 真里子
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 6, 69-89
Issue Date	2008-03-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34577
Type	bulletin (article)
File Information	P069-090yamaguchi.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts

授受補助動詞の使用制限に与える敬語化の影響について

―「くださる」「いただく」を用いた感謝表現を中心に―

山口真里子

The Influence of Honorific and Polite Expressions on the Grammaticality of Complex Sentences Containing Benefactive Auxiliaries in Japanese.
—Focusing on Expressions of Thanks Using *kudasaru* or *itadaku*

YAMAGUCHI Mariko

abstract

This paper analyses complex sentences consisting of an initial clause including a benefactive auxiliary verb and a second clause including an expression of thanks. The study focuses in particular on sentences using *kudasaru* or *itadaku*.

Complex sentences of this kind show grammatical constraints as illustrated by *oshiete (*moratte/kurete) arigatoo*. However, if the verb *morau* is changed to the object-honorific *itadaku*, the whole sentence is rendered as *oshiete itadaite arigatoo gozaimasu*. This kind of expression sounds natural and is in common use, appearing even in Japanese textbooks.

Based on the above facts, the paper examines how the usage of honorific and polite expressions affects the grammaticality of sentences containing benefactive auxiliary verbs. First, the paper investigates prior research related to *te*-form conjunctive sentences expressing appreciation. Second, the paper suggests three possible factors which affect grammaticality, based on analysis of acceptance criteria for the expressions **V-te moratte arigatoo* and *V-te itadaite arigatoo gozaimasu*. Finally, the paper concludes that honorific and polite expressions affect the acceptability of sentences through cancelling the inherent directionality of benefactive expressions.

1 はじめに

授受動詞には、物の授受を意味する本動詞としての用法の他に、動詞の「テ形」に後接し、事柄（行為）の授受を表す補助動詞としての用法がある。本稿で考察の対象とするのは後者である。外国人学習者向けにつくられたある日本語中級教科書には、授受補助動詞を用いた以下のような会話文が掲載されている。（ただし、以降、下線部分は本稿筆者による。）

1）

井上　：クラークさんですね。わざわざ<u>来てくださって</u>ありがとうございます。

クラーク：こちらこそお時間を<u>さいていただいて</u>―あのう、『<u>ていただいて</u>、ありがとうございます』でいいんでしょうか。

井上　：ええ、りっぱな日本語ですよ。『ありがとうございます』の前は、『<u>てくださって</u>』でも『<u>ていただいて</u>』でもいいんですよ。

『リーとクラークの冒険』（p. 117）

上記会話文中の問題となる部分を取り出してみる。

2）わざわざ<u>来てくださって</u>ありがとうございます。
3）お時間を<u>さいていただいて</u>（ありがとうございます）。

これらはいずれも一般的に使用されている表現である。ところが、2）、3）の授受補助動詞の部分を敬語形から非敬語形に戻して考察してみると、以下のようになる。

4）　わざわざ<u>来てくれて</u>ありがとう。
5）　*時間を<u>さいてもらって</u>ありがとう。

つまり、前件に恩恵行為の授受表現を用い、後件に感謝の表現「ありがとう」が来る文では、使用する授受補助動詞に文法的な制限があるのである。松岡他（2000）も同様に、以下の例をあげている。

6）教えて｛*もらって／くれて｝ありがとう。　（p. 114）

（本動詞を「V」で表示するとすれば）、上記例5）において不適格な「Vてもらう」を謙譲語にしたことによってできた「Vていただく」文は、本来ならば、元の文と同様に不適格となるはずである。しかしながら、上記3）のような文は不適格であるとは見なされず、他の一般的な日本語教科書に

さえ掲載されているという現状がある。また、文化審議会答申（2007）の「敬語の指針」では、3）のような文に関し、不適切な用法であると感ずる者がいることに言及してはいるものの、敬語の慣用的用法として特に問題はないのではないかとの立場を示している。このように「Vてもらう」が敬語化され「Vていただく」になった際、文の許容度が高まるのはなぜであろうか。

授受表現を扱った先行研究は多い。それらの中に、「くれる」と「もらう」の両者を比較し、相違点について論じている文献がいくつか存在している。しかし、上記3）のような文において、「Vていただいて」が不適格とはされないメカニズムに関し、詳しく検討している文献は、筆者の知る限りでは見あたらない。

以上のことから、本稿は、敬語使用が日本語の授受補助動詞の文法適格性に与える影響について検討することを目的とする。特に、原因・理由を表す「テ形」接続文の中から、「くださる」「いただく」を用いた感謝表現に焦点をあてて考察する。そのため、まず、1）にあげた教科書以外の一般的な初級及び中級日本語教科書に掲載されている文型を確認しておく。次に、授受補助動詞を含む「テ形」接続文と感情表現の関係に特に焦点をあてながら、先行研究及び問題点を確認する。さらに、インターネットにおける使用実態と日本語教師の規範意識について調べた結果を提示する。その上で、それらを踏まえ、「*Vてもらってありがとう」と関連する「Vていただいてありがとうございます」が許容される3つの誘因を考察していく。そして、最終的には、敬語使用が授受表現の持つ「方向性」の制限を解除し、文の適格性に大きく影響を与えることを主張する。この、本稿で使用する「方向性」という語の定義については、本稿5-1にて詳しく言及する。

なお、本稿における「*」の印は文法的に不適格であることを示し、「?」の印はやや不自然であることを示すものとする。また、本稿において出典を明記していない用例はすべて本稿筆者の作例であり、その際の自然か否かの文法適格性に関する判断は日本語母語話者である筆者の内省によるものであることをあらかじめ断っておく。

2 一般的な初級及び中級日本語教科書の確認

本章では、本稿が考察対象とする文が一般的な初級及び中級日本語教科書ではどのように提示されているのかについて確認する。本稿第1章の1）で見たようなパターンの文の中から主な例文を抜粋し、以下に掲載する。

①『みんなの日本語初級II』

7）先日は荷物を<u>預かってくださって</u>、ありがとうございました。

(p. 129)

8) 助けていただいて、ありがとうございました。 (p. 135)

②『新文化初級日本語II』

9) 先日はお見舞いに来てくださって、どうもありがとうございました。 (p. 109)

10) 皆様、本日も日本翼航空をご利用いただきまして、ありがとうございます。 (p. 130)

③『文化中級日本語II』

11) お忙しい中、わざわざお見舞いに来ていただいてすみません。(p. 57)

12) 本日は雨天にもかかわらず、多数の皆さんにご来場いただき、ありがとうございます。 (p. 101)

13) 先日はいい病院を紹介してくださってありがとうございました。(p. 147)

④『初級日本語 げんきII』

14) 日本語や日本の生活についていろいろ教えてくださってどうもありがとうございました。 (p. 287)

上記①②の教科書では、原因・理由を述べる「テ形」の後件に「ありがとうございます／ございました」が来る場合、「くださって」と「いただいて／いただきまして」両者を用いた例文が提出されている。③の教科書では、後件に「ありがとうございます／ございました」が来る場合、「くださって」を用いた文が掲載されている。この後件と同様の場合で「いただく」の方を用いた例は、「いただいて」という「テ形」接続文ではなく、12)「いただき、～」のように連用中止法を用いた文型で掲載されている。また、③には11) のように「いただいて」の後に「すみません」が続く文も掲載されている。一方、④の教科書には「いただいて」の後件に「ありがとうございます／ございました)」が続く文型は掲載されていない。また、④の教科書には以下のような説明文があるが、「いただいてありがとうございます／ございました」に関しては言及されていない。

15) When you want to express gratitude to someone and if you want to refer specifically to the action you are grateful for in doing so, you can use the te-form＋くれてありがとう.

verb te-form＋くれてありがとう　Thank you for doing…

手伝ってくれてありがとう。
Thank you for helping me out.

山口真里子 YAMAGUCHI Mariko

If you are thanking someone who needs to be talked to with the honorific language, such as when you and the person are not close or when the person ranks higher than you in any of the social hierarchies, you should say “te-form＋くださってありがとうございました.”

推薦状を書いてくださってありがとうございました。
Thank you for writing a letter of recommendation for me.
（p. 141）

以上、一般的な初級及び中級の日本語教科書に掲載されている本稿考察対象の文について確認を行った。次章では、先行研究及び問題点を確認する。

3 先行研究及び問題点

これまでに授受表現を扱った先行研究は多い。日本語教育の観点から授受表現を扱った文献も数多く存在する。それは、日本語非母語話者である日本語学習者が文法規則をマスターするまでには非常に困難を伴う項目の中の1つだとされているからである。しかしながら、第1章で前述したように、3）の「いただく」が、非文の5）「もらう」から生じた文であることにより、本来の文法規則が崩れていると思われる点について、このメカニズムを詳しく論じた文献は筆者の知る限りでは見あたらない。

本章では、まず、「くれる」と「もらう」両者を比較して相違点を論じている文献を概観する。次に、授受補助動詞を含む「テ形」接続文と感情表現の関係に特に焦点をあて、本稿第5章の考察に入る前に押さえておかねばならない問題点を確認しておく。

なお、授受補助動詞は、一般的には恩恵行為（プラスの利益）を表すが、「あいつを困らせてやる」、「困ったことをしてくれたね」、「そんなことしてもらったら困るんだよ」などのようにプラスの恩恵を表さない用法もある。このマイナスの利益（＝損失）の用法に関しては、「てくれる」については豊田（1974）や玉置（2006）などが、「てあげる」については山本（2003）などが、「てやる」「くれる」「てもらう」については山田（2004）が、それぞれ考察を行っている。本稿では扱わないため、それらの文献を参照されたい。

3.1 「くれる」「もらう」両者の相違点を論じた文献

「くれる」「もらう」両者の相違点を論じた文献としては、益岡（2001）、高見・加藤（2003-a, b）、金沢（2007）などがあげられる。益岡（2001）は、「Vてもらう」文を、話者の働きかけの意図がない「受動型てもらう」

構文と話者の働きかけの意図がある「使役型てもらう」構文に2大別した。高見・加藤（2003-a, b）は、「～てもらう」文は受益者が前もって働きかけたり、期待を寄せたりしている場合に使われるのが一般的であると述べている。そして、同論文は「Vてくれる」文は「利益」を意味するが、「Vてもらう」文は「利益」に「おかげ（感謝の表明）」の意味もプラスされており、これが両者の差異となっていると主張している。また、金沢（2007）は、「Vてくださる」よりも「Vていただく」の方が近年好まれて使用される傾向にあるとしている。その理由として、「Vていただく」の場合「相手」は必須ではないニ格補語となるため、「相手に直接言及しない表現形式である（pp. 51-52）」ことをあげている。つまり、「とりあえず相手とは直接関わらないで済む感覚（p. 51）」という現代人の心理が話者の根底にあり、「Vてくださる」よりも「Vていただく」の方が選択しやすくなるのではないかと推測している。以上の相違点について、詳しくは各文献を参照されたい。

3.2　後件が感情を表す「テ形」接続文と授受補助動詞の関係

本節では、原因・理由を表す「テ形」節とその後件に来る感情表現について、先行研究における問題点を確認する。

山田（2004）は、「テ形」接続文の前件に授受表現が現れ、後件に「感情表出表現」が来る場合の授受補助動詞の選択には、一定の制限が見られるとしている。

16）わざわざ来て｛a. くれて／b. ？もらって｝どうもありがとう。（p. 306）
17）わざわざ来て｛a. ？くれて／b. もらって｝すみません。（p. 306）

つまり、16）のように後件が「ありがとう」の場合には「くれる」の方が適格であり、17）のように後件が「すみません」の場合には「くれる」ではなく「もらう」を取るという使用制限である。

しかし、同研究は、以下のような例もあげ、それぞれの授受補助動詞における使用制限を提示している。（ただし、以下のカタカナ表記は、山田（2004）において、山田氏自身の作例であることを示している。）

18）出迎えて｛a. クレテ／b. もらって｝嬉しかった。　（p. 306）
19）そう言って｛a. クダサッテ／b. いただいて｝うれしい。（p. 307）
20）来て｛a. くれて／b. ？モラッテ｝嬉しいよ。　（p. 307）

同研究ではこれらの文に関して、「感情表出表現」を明確に定義しないまま論じている。18）～20）の文末の違いを見ると、これらの文における授受補助動詞の使用制限の判断にはやや疑問が生じる。また、述語動詞の過去形と非過去形は文の適格性に関与するにもかかわらず、同論文では考慮されていない。20）は、終助詞「よ」が付加されている。「よ」には聞き

手に情報を与える働きがあることから、純粋な感情表出表現であるとは言えない。

一方、山下（1999）は、「感情表現」とは「①話者の、②現在の、③感情」を表すという3つの条件を満たした表現であるとまず定義した。そして、感情が表現されている述語は、「感情形容詞」のみに限定されるのではなく、「寝られない」などの可能形の否定形、「すみません」や「ありがとう」などの挨拶、慣用表現、影響が発話時に及ぶ「だまされてしまった」などの迷惑受身もその範疇に入ると定義した。その上で、後件に感情表現を含む文では、前件の原因・理由節は「テ形」で接続されること、なおかつ、前件には動作性の低い述語が生起することを指摘した。可能形の否定形も感情表現とするのは、21）のように、その否定形に「困った」という感情が含意されると考えられるためである。

21）うるさくて、寝られません。　（p. 8）

反面、「可能形の肯定形」は下記22）のように非文となる。

22）*静かで、寝られます。　（p. 8）

ただし、下記23）のように、可能形の肯定形が程度を表す副詞「とてもよく」などと共に用いられた場合には、適格文となる。「満足だ」という気持ちが含意されることから、感情表現に近くなるためだと考えられる。

23）静かで、とてもよく寝られます。　（p. 12）

つまり、同論文は、「話者の、現在の、感情」を表す21）のような文が典型的な原因・理由を表す「テ形」接続文であるとしたのである。そして、下記24）、25）のような文は、2つの事態の時間的順序による生起、つまり、順次動作であり、副次的に原因・理由の読みができるだけだと主張した。

24）彼は驚いて、とびあがった。　（p. 12）
25）手紙を読んで、安心しました。　（p. 12）

さらに、同論文では、様々な文を取り上げ、文法適格性の判定調査を行っている。このアンケート調査の回答者は日本語母語話者55名である。方法は、27個の「テ形」接続文を読み、自然であれば「○」、不自然であれば「？」、間違っていると思えば「×」をつけるように指示するという形式である。回収後、「○」を2ポイント、「？」を1ポイント、「×」を0ポイントとして、集計を出している。その中に、授受補助動詞が含まれるものがいくつかある。

	○	?	×	point
26-a）彼が家に来てくれて、私は嬉しいです。	53	1	1	107
26-b）彼に家に来てもらって、私は嬉しいです。	29	13	13	71
26-c）彼が家に来て、私は嬉しいです。	27	12	16	66

（p. 11）

上記26-a）～26-c）の中で最も文法適格性が高いのは26-a）であった。それは、上記3つの中で「Vてくれる」が最も動作性が低いからであると同論文は述べている。26-b）では「来てもらう」という表現が使われている。「来てもらう」の場合には、「来てもらおう」という意志形（意向形）をつくることが可能であることから「もらう」という動詞は意志性を持ち得る。そのため、動作性が感じられ、26-b）は26-a）ほど許容されないのであろうと説明している。

以上のことから、原因・理由を表す「テ形」接続文を扱う本稿では、18）や24）、25）のような過去形の述語は感情表現とは見なさず、単なる叙述表現であると解釈する。また、20）のように終助詞「よ」が付加された文も直接的な感情表出ではないことから感情表現の範疇には入れず、考察の対象から除外する。ただし、感謝の表現である「ありがとう」については、「タ形」で表れる「ありがとうございました」も感情表現であるとする。相手の過去の行為に対する感情表出であると考える。次の文を見てみよう。

27）あの時はありがとうございます。

映画「千と千尋の神隠し」より千尋の台詞

27）の「ありがとうございます」は「ありがとうございました」に置き換えが可能である。「ありがとうございました」の「タ形」は過去形ではなく、「完了」もしくはモダリティを表していると考えられるためである。

4 使用実態及び日本語教師の規範意識の調査

本章では、本稿が考察対象とする文のインターネットによる使用実態と日本語教師の規範意識について調べた結果を報告する。

4.1 インターネットによる使用実態の確認

この調査の目的は2つである。1つ目は、実際の使用において、以下の規範的な文法的制限が顕在化しているのか否か、実態を確認することである。

28）Vて｛くれて／*もらって｝ありがとう。
29）Vて｛*くれて／もらって｝すみません。

30）Vて｛くれて／もらって｝うれしい／嬉しい（です）。

2つ目は、28）と比較して、下記31）のように敬語形「いただいて」を用いた例が一体どの程度使用されているのか、確認を行うことである。

31）Vていただいてありがとうございます。

なお、本稿3-2において前述したように、29）、30）に関し、過去形の文は調査対象からはずすこととする。また、28）の「ありがとう」に関しては、「ありがとうございます」と「タ形」の「ありがとうございました」も調査対象とする。

まず、2007年9月7日現在の「YAHOO JAPAN」で実例の検索を行った。その結果、表A～Dにあげた件数がヒットした。

■ 表A

32-a）教えてくれてありがとう（ございます／ございました）	約14,900,000件
32-b）教えてもらってありがとう（ございます／ございました）	約13,700,000件
33-a）教えてくださってありがとうございます／ありがとうございました	約4,870,000件
33-b）教えていただいてありがとうございます／ありがとうございました	約168,000件
34-a）教えてくださいましてありがとうございます／ありがとうございました	約752件
34-b）教えていただきましてありがとうございます／ありがとうございました	約23,000件

■ 表B

35-a）手伝ってくれてありがとう（ございます／ございました）	約2,090,000件
35-b）手伝ってもらってありがとう（ございます／ございました）	約1,900,000件
36-a）手伝ってくださってありがとうございます／ありがとうございました	約522,000件
36-b）手伝っていただいてありがとうございます／ありがとうございました	約170件
37-a）手伝ってくださいましてありがとうございます／ありがとうございました	約9件
37-b）手伝っていただきましてありがとうございます／ありがとうございました	約30件

■ 表C

38-a）手伝ってくれてすみません	0件
38-b）手伝ってもらってすみません	約708,971件

■ 表D

39-a）来てくれてうれしい／嬉しい（です）	約19610000件
39-b）来てもらってうれしい／嬉しい（です）	約16290000件

検索の結果、表Aと表Bに関する32-a)、35-a）と32-b)、35-b）との比較では、文法的に適格である「くれる」を用いた文の方がより多く使われていることがわかった。また、33-a)、36-a）と33-b、36-b）との比較では、「くださる」の使用例の方が多く見られた。

さらに、「くださる」「いただく」を「くださいます」「いただきます」のように、丁寧形の「ます」を付加した形に換えて検索を行った。つまり、「Vてくださって」「Vていただいて」から、「Vてくださいまして」「Vていただきまして」に換えてみたのである。その結果、34-a)、37-a)「くださいまして」と34-b)、37-b)「いただきまして」の使用数が完全に逆転するということがわかった。表Cにおいては、29）で示した文法制限と合致した結果が得られた。表Dにおいては、「くれる」を用いた文の方がやや多いものの、30）で示した文法制限とほぼ合致していると言える結果となった。

4.2　日本語教師の規範意識に関する確認

次に、考察対象の文が教育の現場ではどのように考えられているのか、日本語教師の規範意識を確認してみた。日本語母語話者である日本語教師10名（20代1名、30代3名、40代5名、50代1名）に文法適格性のアンケート調査を行った。調査を始める前に、まず、前節の表A～Dと全く同様の文を、それぞれの各表のグループごとにまとまらないよう、無作為に入れ替えた。そして、グループ分けせずに無作為に並べたそれらの文を質問紙として作成し、回答してもらった。回答方法は、以下の記号のうち1つだけを付けてもらうという方式である。なお、調査実施にあたっては、本稿第1章で問題提起した内容の事前説明をいっさい行わない状況で回答を依頼している。

①「日本語として自然で、文法的に問題がないと思う文」には→○
②「日本語として自然ではなく、文法的に誤りだと思う文」には→×
③「日本語としてやや不自然だが使わないことはないかもしれない文、あるいは「○であるか×であるかの判断に迷う文」には→？

そして、調査後、「○」は2点、「？」は1点、「×」は0点として合計ポイントを集計した。最後に、例文を無作為に並べ替える以前の状態に戻し、アンケートの結果を整理したものが以下の表E～Hである。最も文法適格性が高い文は20点を示すことになる。

■ 表E

40-a）教えてくれてどうもありがとう。	17点
40-b）教えてもらってどうもありがとう。	2点
41-a）教えてくださってどうもありがとうございます。	16点
41-b）教えていただいてどうもありがとうございます。	12点
42-a）教えてくださいましてどうもありがとうございます。	10点
42-b）教えていただきましてどうもありがとうございます。	18点

山口真里子 YAMAGUCHI Mariko

■ 表F

43-a）手伝ってくれてどうもありがとう。	20点
43-b）手伝ってもらってどうもありがとう。	3点
44-a）手伝ってくださってどうもありがとうございます。	17点
44-b）手伝っていただいてどうもありがとうございます。	12点
45-a）手伝ってくださいましてどうもありがとうございます。	9点
45-b）手伝っていただきましてどうもありがとうございます。	18点

■ 表G

46-a）手伝ってくれてすみません	2点
46-b）手伝ってもらってすみません	14点

■ 表H

47-a）来てくれてうれしい／嬉しい（です）	18点
47-b）来てもらってうれしい／嬉しい（です）	12点

上記の表E及び表Fの数値を見ると、日本語教師に対して行った文法適格判断調査が、ヤフー検索の結果とまったく同じ箇所において、顕著な違いを示していることに気付く。つまり、「くれる」「もらう」を単に敬語形に換えただけの時点では、依然として「くださって」の方が「いただいて」よりも優位に立っていたが、「敬語形＋丁寧形」に換わったところで文法適格性判断の点数が逆転したのである。

なお、表Gにおいては、ほぼ文法制限と合致した結果が得られた。しかし、表Hについては、47-a）「くれる」の方が、適格性がやや高いと判断された。

以上、考察対象の文に関する使用実態及び日本語教師の規範意識を見た。これらにより、敬語使用が授受表現の文法的制限を解除したと見なせる実例及び実態が確認できた。また、敬語化の度合いが高まるほど制限が解除されると思われるような現象も一部見られた。では、一体なぜこのように敬語使用が文法に影響を与え、その使用制限を解除するのであろうか。次章では、その誘因を探っていく。

5 考察（文法的な使用制限に影響を与える誘因について）

前章で見てきた実例により、本来ならば不適格となるはずの「Vていただいてありがとうございます」及び「Vていただきましてありがとうございます」が許容されている現象を確認した。本章では、これらが許容される背景を考察し、そこから考えられる3つの誘因を提示する。

5.1　第1の誘因（授受表現の仕組みと敬語化の関係）

授受表現の仕組みは様々なファクターで成り立っている。仕組みの重要なファクターとして、まず、「視点[1]」がある。授受表現における視点とは、発話者が発話内容の出来事を与え手（与益者）と受け手（受益者）のどちらの立場から見て述べているのかという観点のことである。庵（2001）は授受動詞と視点の関係を以下のような表にまとめている。

48）

	やる／あげる	くれる	もらう
与え手	主語		目的語
受け手	目的語		主語
視点	主語（与え手）	目的語（受け手）	主語（受け手）

（p. 120）

「あげる」は、話し手の視点が与益者にある。また、本稿の考察対象の「くれる」と「もらう」は、共に受益者に視点を置いていることになる。

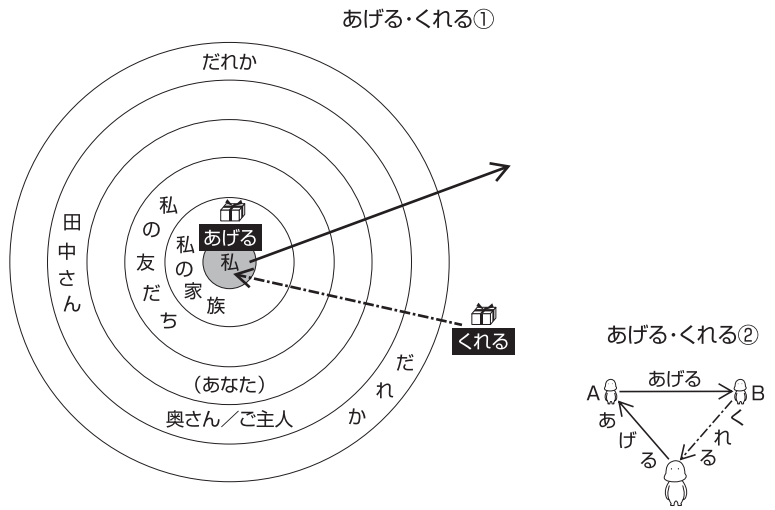
49）田中さんは私の妹に本を貸してくれた。
50）私の妹は田中さんに本を貸してもらった。

つまり、上記49）、50）の場合には、両者とも「私の妹」の立場から事態を見ているため、視点は「私の妹」に置かれていることになる。

次に重要なファクターとして、授受表現が持つ「複数の方向性（①内・外（ウチ・ソト）の方向、②主格と与格の方向、③上・下の方向）」がある。

まず、方向性の1つ目である内・外の向きについて説明する。これらの移動の方向は、以下に示すような、日本語教育において一般的に利用される同心円図1、2で考えるとわかりやすいであろう。

■ 図1



「学習者の理解を助ける図」森越（1994：161）

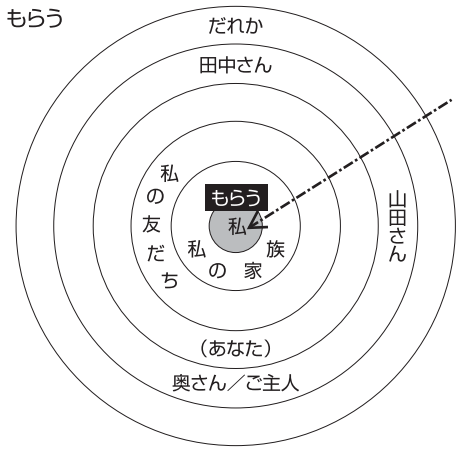
▶1　視点制約については、詳しくは久野（1978）を参照されたい。

山口真里子 YAMAGUCHI Mariko

同心円図1、2においては、話者である自分、つまり「私」が中心に位置する。「私」に近い関係の人物は内側の円になり、外側の円に向かっていくに従って「私」から遠い関係の人物となる。したがって、内・外の方向とは、事柄（恩恵行為）が移動する際、内側から外側の人物に向けて移動するのか、あるいはその逆の移動の向きであるのかの違いを表すことになる。移動の向きは矢印で表している。図1の「あげる・くれる①」を見てみよう。「あげる」の場合には、内側から外側に矢印が向く。そして、「くれる」の場合には、外側から内側に矢印が向く。三人称間で恩恵行為が移動する場合は、図1「あげる・くれる②」のA、Bの人物図で示されているように「あげる」が用いられる。つまり、Aの人物からBの人物への移動方向を示す矢印は、同心円の図の中の「同じ円（丸枠）の中」に存在することになる。

また、「もらう」の場合には、図2を見られたい。

■ 図2



「学習者の理解を助ける図」森越（1994：161）

「もらう」の場合は、「くれる」と同様に、外側から内側に矢印が向くことになる。49）、50）の例文で言えば、両者とも、外側である「田中さん」から内側の私の家族である「私の妹」に矢印が向くことになる。

なお、この時、話者は自分にとって内側の人物である「私の妹」が受益者になったことにより、受益者が得た恩恵を同じ内側の者として喜ぶべきことであると共感しているのだと考えられる。つまり、1つ目の「視点」というファクターを用いて説明すれば、例49）、50）では、話者は「内側寄りの視点」から見て発話していることになる。つまり、「内・外の方向」と「視点」という両者のファクターには関連性があることになるのである。

次に、方向性の2つ目である主格と与格に関する移動の向きについて説明する。「あげる」及び「くれる」では与益者が主格に立ち、「もらう」では受益者が主格に立つことになる。つまり、上記49）の「くれる」では、下記49’）のように主格の「田中さん」から与格の「私の妹」に恩恵行為が移動する。しかし、50）の「もらう」では、「私の妹」が主格に立つため、下記50’）のように「くれる」とは逆の向きになる。

（くれる）
49’）田中さん　→　私の妹
（主格）　（与格）

（もらう）
50’）私の妹　←　田中さん
（主格）　（与格）

なお、1つ目のファクターである「視点」を用いて説明するとすれば、「くれる」では与格に「視点」があり、「もらう」では主格に「視点」がある。つまり、49）の与格「私の妹」と50）の主格「私の妹」に「視点」が置かれていることになる。したがって、「主格と与格の方向」と「視点」という両者のファクターにも関連性があることになる。よって、これら3つのファクター「視点、内・外の方向、主格と与格の方向」は、各々が独立して存在しているのではなく、相互関係がある。互いに関連し合うことにより、授受表現の仕組みに関与していることになるのである。

次に、方向性の3つ目である上下の向きについて説明する。これは、敬語に関する方向性である。上記例49）、50）の「田中さん」を「先生」に換えてみよう。

51）先生は私の妹に本を貸してくださいました。
52）私の妹は先生に本を貸していただきました。

「差し上げる」は目下から目上へ、つまり、下から上の向きに恩恵行為が移動する。そして、「くださる」と「いただく」は目上から目下へ、つまり上から下への向きとなって恩恵行為が移動する。ただし、「くださる」と「いただく」は下記51'）、52'）からわかるように、主格に立つ者が異なっているのである。

（くださる）
51’）先生　→　私の妹
（上）　（下）

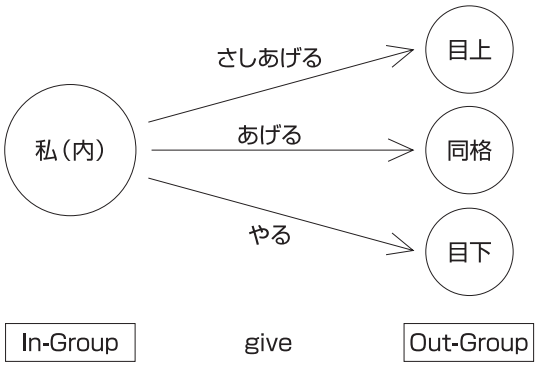
（いただく）
52’）私の妹　←　先生
（下）　（上）

これまで確認してきたように、授受表現の基本的仕組みは、「視点、内・外の方向、主格と与格の方向」という3つのファクターで成り立ち、しかもそれらは関連し合っていた。その上、そこに、さらなるファクターとして敬語という「上下の方向」が加わることになる。すなわち、下記図3～5で示すように、4つものファクター（視点と3つの方向性）が入り組んで

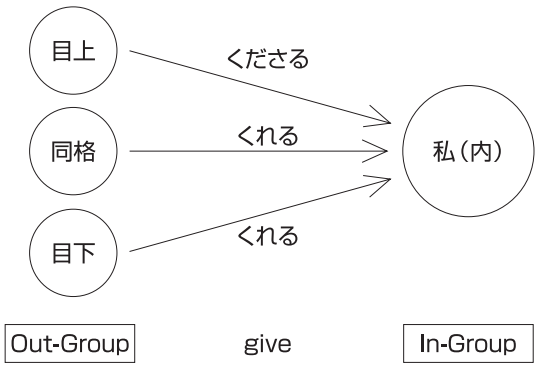
存在している仕組みとなるのである。

なお、下記図3～5の左側は主格を示し、右側は与格を示すこととする。また、In-Groupとは内側の人物のことで、「私」及び「私に近い関係」を表す。Out-Groupとは外側の人物のことで、「私から遠い関係」を表す。

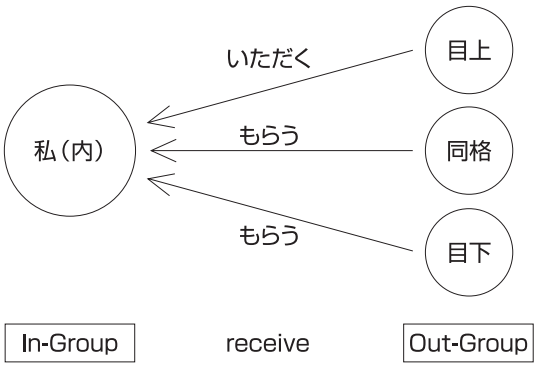
■ 図3



■ 図4



■ 図5



したがって、本稿第1章であげた例、不適格な「*Vてもらってありがとう」から生じたはずである「Vていただいてありがとうございます」が許容される現象は、本来の授受補助動詞が持つ主格と与格の関与する移動方向に混乱が生じている現象であると判断できよう。第1章で前述したように、「Vてくれてありがとう」が規範であるため、本来は「くれる」を「くださる」に敬語化した「Vてくださってありがとうございます」の方が規範となるはずである。それにもかかわらず、敬語形「いただく」が用いら

れている現象は、「いただく」の非敬語形「もらう」と「くださる」の非敬語形「くれる」とを混同していることにつながる。「もらう」と「くれる」の両者を比較すると、「視点」及び「外から内へ向かう方向性」は双方ともまったく同様であることがわかる。しかし、両者は「主格と与格の選択とその方向性」において異なっている。つまり、この点が文法性を規定する鍵となっているのだと言える。

なお、このように、主格と与格の移動方向に混乱が生じている現象は、以下の53）のような非規範的な助詞使用の例にまで広がってきている。

53）？多くのみなさんが来ていただいてありがとうございます。

53）は、54）と55）の混同から生じる。

54）多くのみなさんが来てくださってありがとうございます。
55）多くのみなさんに来ていただいてありがとうございます。

以上見てきたように、「Vていただいてありがとうございます」が適格のように判断されるのは、授受補助動詞を敬語化し、謙譲語「いただく」を用いることによって、扱うファクターがさらに増え、混乱を招いた結果だと考えられる。発話者が後件の「ありがとうございます」という感謝表現に引かれ、敬語を重視するあまり、上下方向のファクターに敏感になるのであろう。そして、最終的に上下方向のファクターが主格と与格の移動方向のファクターよりも優位に立つのだと考えられる。これが「Vていただいてありがとうございます」が許容される第1の誘因となる。

なお、本来は誤用であるが、敬語を重視するあまりにあたかも正用のように用いられているのだと思われる例が他にも存在する。以下56）や57）の下線部に見られるような例である。（ただし、56）の例には、授受表現は含まれてはいない。）

56）国際通話がカードでご利用できます。
NTT（緑色）公衆電話の電光掲示板

57）今回の試算についても、所得等については、平成17年11月末時点の数値を使っておりますので、あくまでもこの試算は参考ということでお聞きしていただきたい。
インターネットサイト「伊勢市Ise City」[2]

「お／ご～する」は謙譲語である。尊敬語の場合には「お／ご～になる」が使われる。56）の場合、「利用する」の「する」の部分が可能形「できる」になっているが、これは尊敬語ではない。よって、尊敬語「ご利用になります」を可能形にして、「ご利用になれます」とすべきである。また、57）の場合には、「お聞きになっていただきたい」とすべきである。（あるいは、

►2 「平成17年度第1回伊勢市国民健康保険運営協議会会議録（概要）」のページより

開催日時：平成18年2月2日（木）午後2時30分～午後3時40分
開催場所：伊勢市役所本庁3階　議会委員会室

http://www.city.ise.mie.jp/icity/browser?ActionCode=content&ContentID=1140757464283&SiteID=0000000000000&FP=seclist&RK=1188932528077

「お聞きいただきたい」、「お聞きください」も可である。）これら「お／ご～する」及び「お／ご～になる」の敬語形は、元の動詞に「れる／られる」をつけるだけという単純な敬語形の作り方とは異なり、複合要素から成っている。「お／ごVする」、「お／ごVになる」の「V」の前後を換えねばならないため、敬語化する際に扱うファクターが元々多いのである。その上、56）の場合には、さらに可能形に変えるという作業も伴う。また、57）の場合には、元の「Vてもらいたい」の部分も「Vていただきたい」に敬語化する必要がある。したがって、話者は、扱う複合要素の中の一部分のみを敬語化したことにより、（その他は正しく敬語化できていなくとも）、全体を敬語化したものとみなしてしまうところからこれらの誤用が生じるのではないかと思われる。56）、57）のような誤用の実例はかなり見られ、枚挙にいとまがない。特に56）のような例は、誤用と意識されないまますでに定着したかのようにも見える。このような現状からも、扱うファクターが多い場合には、「まず敬語を使用する」ということが話者の意識の先に立っているのではないかと考えられる。

5.2　第2の誘因（意志性と敬語化の関係）

本稿5-1では、第1の誘因として授受表現の仕組みと敬語化の関係をあげた。次に、第2の誘因として意志性と敬語化の関係をあげる。

本稿3-2において、後件に感情表現が来る「テ形」接続文では、前件には意志性の高い述語は使われないことを述べた。

	○	?	×	point
26-a）彼が家に来てくれて、私は嬉しいです。	53	1	1	107
26-b）彼に家に来てもらって、私は嬉しいです。	29	13	13	71
26-c）彼が家に来て、私は嬉しいです。	27	12	16	66

山下（1999：11）

26-c）で示した文は、前件に「来る」という動作性及び意志性の高い述語が来ているため、やや適格性に欠ける。しかし、58）のように、意志性のない述語が前件に来た場合は自然な文となる。

58）晴れになって、私は嬉しいです。

また、26-c）の「来る」を可能形に換えた26-c'）のような文になると自然な発話となる。この文の可能形は状態を表しており、前件の意志性が失われるからである。

26-c'）彼が家に来られて（来ることが出来て）、私は嬉しいです。

さらに、授受補助動詞をプラスした文で考えてみよう。本稿3-2で述べたように、「（Vて）くれる」は「*（Vて）くれよう」という意志形を作るこ

とができないことから、話者の意志性を表現しない。しかし、「(Vて) もらう」の場合には「(Vて) もらおう」という表現が可能なことから、話者の働きかけを含意する。つまり、「(Vて) もらう」には意志性があることになる。したがって、上記26-b) は、26-a) に比べてやや不自然で座りの悪い文に感じられると判断されたと考えられる。

ところが、上記26-b) の「(Vて) もらう」を可能形に換えれば、意志性はなくなり、以下26-b') のように自然な文となる。

26-b') 彼に家に来てもらえて、私は嬉しいです。

そして同様に、敬語化した場合にも、意志性が弱くなったと見なすことができる。

59) 先生が来てくださって嬉しいです。
60) 先生に来ていただいて嬉しいです。

つまり、敬語表現というのは、直接的表現を避けて、間接的あるいは婉曲的な表現となるため、元々の動詞が持つ動作性・意志性が希薄になると考えられるのである。

以上のことから、本稿第1章であげた例、不適格な「*Vてもらってありがとう」から生じたはずである「Vていただいてありがとうございます」の文は、「もらう」から「いただく」という敬語に換えたことで動作性・意志性が低くなったと判断される。後件に感情表現を含む文では、前件の原因・理由節は「テ形」で接続される。そして、その前件には、前述したように、動作性の低い述語が生起する。したがって、敬語化で動作性・意志性が低くなった「Vていただいて」という表現は、後件の感情表現「ありがとうございます」とマッチすると判断される。この敬語化による動作性・意志性の緩和が、「Vていただいてありがとうございます」の許容度を高める第2の誘因である。

5.3 第3の誘因（敬意度と敬語化の関係）

これまでに「Vていただいてありがとうございます」の許容度が高まる誘因として、2つあげてきた。第1の誘因は、4つものファクターからなる授受表現の仕組みと敬語化の関係であった。また、第2の誘因は、意志性と敬語化の関係であった。最後に、第3の誘因として、敬意度と敬語化の関係をあげる。

失礼にはならないよう配慮する敬意表現の観点から、下記で示すように、一般的には前件の表現と後件の敬意度とは合致しなければならないと言える。これは文体統一上の問題でもあるとも言えよう。

61) ？教えてくれて大変ありがとう。
62) ？教えてくれて大変ありがとうございます。

61）は「大変」という副詞を用いて敬意度を高めているにもかかわらず、前件の「くれて」や後件の「ありがとう」がややぞんざいな表現であるため、前件と後件が副詞とマッチしていない。また、62）では、前件の動詞「くれる」が後件の丁寧さを持った表現にそぐわないため、不自然な文になる。下記63）のような前件と後件のバランスが良い文にすると自然になる。また、下記64）、65）のように、後件の表現の敬意度が上がると、前件の動詞もそれに合わせて「くださる／いただく」または「くださいます／いただきます」に換える必要がある。

63）教えてくれてありがとう。
64）教えて｛くださって／いただいて｝大変ありがとうございます。
65）教えて｛くださいまして／いただきまして｝大変ありがとうございます。

その上、目上の者に対する発話では、敬意度が上がるにつれて、直接的な感情表現を避ける傾向がある。直接的な感情表出は稚拙な印象に受け取られる場合があるため、感情を抑えた硬い表現を用いるのだと考えられる。

66）教えて｛くださいまして／いただきまして｝大変感謝しております。
67）*教えて｛くれて／もらって｝大変感謝しております。

上記66）、67）の例からも、文の丁寧度及び文体統一の点から判断して、前件と後件の表現が合致しなければ不自然な文となることが見て取れるであろう。

ただし、「教えてくれた人物」が聞き手本人ではなくて第3者であり、話者が聞き手に対して謝辞を述べるのではなく、単に丁重語を用いて話しているような場合には、67）は適格文となるのは言うまでもない。例えば、以下68）、69）のような場合である。

68）（友人が私に）教えてくれて大変感謝しております。
69）（私は友人に）教えてもらって大変感謝しております。

これまで述べてきたことから、本稿第1章であげた例、「Vていただいてありがとうございます」の場合には、まず、発話者が後件の敬意度の方に合わせる形で前件に敬語形を取るのだと考える。その際、敬語を用いるのだということに話者の意識が向き、他のファクターよりも敬語使用が優先される。そのために「いただく」を使用するのだと考える。元の授受補助動詞「もらう」と感情表現「ありがとう」との間にある本来の文法的制限の意識が薄れ、文の適格性の判断が緩くなるのであろう。

以上のように、本章では「Vていただいてありがとうございます」が許容される誘因を探ってきた。そして、考察の結果、3つの誘因を提示した。

それらは、第1に4つものファクターからなる授受表現の仕組みと敬語化の関係、第2に動詞の意志性と敬語化の関係、第3に後件の敬意度と敬語化の関係である。敬語化と深く関連するこれら3つの誘因が重なり合い、絡み合って文法適格性に大きく影響を与えるものと考える。つまり、「Vていただいてありがとうございます」が許容されるのは、授受補助動詞が本来持つ主格と与格の方向制約よりも敬語の上下の方向性が勝るという現象であると言えよう。

6 おわりに

本稿は、敬語化が日本語の文法適格性に与える影響について、「Vてありがとう」構文を題材に検討した。特に、授受補助動詞の敬語化に着目し、非文「*Vてもらってありがとう」からできた「Vていただいてありがとうございます」が許容される背景を探ってきた。そして、そこから考えられる誘因を3つ示した。結論として、提示した3つの誘因と関連する敬語使用が「Vていただいてありがとうございます」における授受表現の文法的な使用制限を解除し、文の適格性に影響を与えることを主張した。

最後に、今後の課題について述べたい。本稿の考察に入る前に、インターネットにおける使用実態と日本語教師の規範意識を確認した。「くれる」「もらう」を単に敬語形に換えた時点では依然として「くださって」の方が「いただいて」よりも優位に立っていたが、「敬語形＋丁寧形」に換えた時点で実際の使用数及び文法適格性の判断が逆転する現象が見られた。この、敬語化の度合いが高まるほど授受表現の文法的制限が解除されると見なせるような現象が見られたことに関しては、さらなる分析及び考察を進めることが必要である。本稿5-1であげた56)「ご利用できます」あるいは57)「お聞きしていただきたい」などの誤用が多々生じている背景と共に、今後も検討を重ねていきたい。

（2007年10月10日受理　2008年2月5日採択）

► 山口真里子（やまぐち　まりこ）
北海道大学大学院国際広報メディア研究科修士課程修了、札幌国際大学・北海道情報大学・北海道東海大学非常勤講師

参考文献

(1) 庵功雄（2001）『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
(2) 金沢裕之（2007）「「～てくださる」と「～ていただく」について」『日本語の研究』第3巻2号　日本語学会編　pp. 47-53
(3) 北原保雄（2004）『問題な日本語』大修館書店

(4) 久野暲（1978）『談話の文法』大修館書店
(5) 白川博之監修　庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘著（2001）『中級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
(6) 高見健一・加藤鉱三（2003-a）「授受表現の新展開5「～てくれる／もらう」表現の基本的意味」『言語』大修館書店　Vol. 32 No. 5 pp. 96-101
(7) 高見健一・加藤鉱三（2003-b）「授受表現の新展開6「～てくれる」と「～てもらう」の相違」『言語』大修館書店　Vol. 32 No. 6 pp. 96-101
(8) 玉置充子（2006）「恩恵を表さない「テクレル」の用法」『拓殖大学日本語紀要』16巻　拓殖大学国際部　pp. 31-42
(9) 寺村秀夫（1988）『日本語のシンタクスと意味　Ⅰ』くろしお出版
(10) 豊田豊子（1974）「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1号　東京外国語大学外国語学部付属日本語学校　pp. 77-96
(11) 文化庁「文化審議会答申　敬語の指針」（2007）文化庁HP pp. 1-82
http://www.bunka.go.jp/1kokugo/frame.asp{0fl=list&id=1000001687&clc=1000000073{9.html
(12) 益岡隆志（2001）「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』Vol. 30 No. 5　大修館書店　pp. 26-32
(13) 松岡弘監修　庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘著（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
(14) 森越一世（1994）「授受動詞の指導方法-「くれる」を第一に導入する試み-」『北海道大学留学生センター年報　第2号』北海道大学留学生センター　pp. 153-166
(15) 山下好孝（1999）「「から」「ので」「て」-日本語の原因・理由を表す表現について-」『北海道大学留学生センター紀要　第3号』北海道大学留学生センター　pp. 1-14
(16) 山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ-「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法-』明治書院
(17) 山本裕子（2003）「「～テアゲル」の対人的な機能についての一考察」『世界の日本語教育』13国際交流基金　pp. 143-160

日本語教科書

(1) 山上明・鶴田康子（1994）『日本語会話中級教科書1　リーとクラークの冒険』イーストビュー出版　凡人社
(2) 『みんなの日本語初級Ⅱ』（1998）スリーエーネットワーク
(3) 『新文化初級日本語Ⅱ』（2000）文化外国語専門学校編　凡人社
(4) 『文化中級日本語Ⅱ』（1997）文化外国語専門学校編　凡人社
(5) 『初級日本語　げんきⅡ』（1999）　The Japan Times